

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木 幹夫

第16回 【泉鏡花の蛭】

金沢で弁当を買い込んで帰路についた。新幹線内で女に出会った。物語の山道を踏み分けていくと無数の蛭に襲われた。谷あいの宿にようやく辿り着くと女が川原に降りて痒みの走る背中を冷水で洗ってくれた。

列車がトンネルに入った。これは旅の僧侶（聖）の話だが、話を車内にもどすと闇の窓には女の顔が映らない。初夏、山菜のミズを採りに蛭ヶ岳に行った。案内の老婆が一年程前に茸採りに出た連れ合いが戻って来なかったという。「それは大変なことでしたね」「ほんとにそう思うとりますか」ぞつとしてふり向くと姿がない。

朴の葉がガサガサ落ちてきて何やら黒いひかるものが地面を這っている。人の匂いに反応した蛭だ。

肩凝り治療をする祖母の姿を思い出した。悪血を吸って丸々と膨らんだ蛭に線香の火をあてると、ころつと肩から畳に落ちる。無理にひき剥がすと食い込んだ蛭の口が残り、化膿する。血を清める女と川べりで永遠に微睡まどろんでいたいと思った瞬間、宇都宮を過ぎ列車は東京駅へと向かっていた。鏡花の「高野聖」読了。弁当の山菜は食べ残したままだった。